

(報告書)

中国語の入門授業におけるコミュニケーション能力育成の試み

謝

平

1. はじめに

中国語も漢字を使っているから習得しやすいと思っ
て、中国語を履修しようとする学生が多くいる。しかし、
日本人の中国語学習者はどうしても「文字」に頼りがち
になり、リスニング力と会話力が伸びにくい。したがっ
て、入門段階から学生に「口」と「耳」を練習させ、「聞
く力」と「話す力」のコミュニケーションの基本能力¹⁾
を育成する工夫が必要である。

本稿では、筆者が担当する中国語入門クラス（福岡大
学人文学部東アジア地域言語学科一年生）の授業におけ
る実践例を紹介し、その結果を報告する。

2. 入門段階の到達目標及び問題点

2.1 入門段階とは

中国語教育学会学力基準プロジェクト委員会が編纂
した『中国語初級段階学習指導ガイドライン』（2007）
では、「初級段階」について、次のように定義されてい
る。

初級段階とは、大学における第二外国語で毎週2
回（1回は90分）、2年間を通じて学んだ場合の、
合計240時間（中国と同じ50分授業として計算すれ
ば約200時間）の課程を考えている。

さらに『中国語初級段階学習指導ガイドライン』
（2007）では、学習語彙の総数を1000語として、基本語
彙の600語と準基礎語彙の400語に分けられた上で、次の
ように述べられている。

学習語彙の総数は1,000語で、これを第一表600語
と第二表400語に分けている。いわば前者は基本語
彙、後者は準基本語彙である。初級段階の学習にお
いては、両者を一体化したものとしてあつかい、す
べての語彙を習得することが望ましいが、学習状況
に応じたあつかいもできるように、二つの段階に分
けたものである。ほかに別表として、常用あいさつ
語14、常用固有名詞14を掲げている。

本稿では、この「初級段階」の定義を踏まえ、第二外
国語としての中国語入門段階を以下のように定義する。

入門段階とは、週に2回（1回は90分）、一年間
を通じて合計100～120時間の学習過程であり、常用
単語400～600語の習得を目標とする基礎的な段階の
ことである。

2.2 学習目標と問題点

入門段階の学習目標については、学校によって方針が
異なるが、基本的なコミュニケーション能力を有するこ
とを求める大学も多いであろう。中国では中国語を母語
としない学習者に対する、中国語教育の基準を統一する
ことを目的とした学習要領である《国际汉语教学通用课
程大纲》²⁾（2014）が定められている。この学習要領で
は外国語としての中国語が6レベルに分けられている。
基礎段階にあたる1～3級の“语言综合技能”（総合的
な言語能力）については、以下のように設定されている
（表1）³⁾。

表1 《国际汉语教学通用课程大纲》1～3級の言語能力の到達目標

	語彙数	総合的な言語能力
一級	150語	<p>能理解最基本的、与个人和日常生活密切相关的简单而又十分有限的语言材料，有时需要借助肢体语言、实物和语言环境。能初步了解人物的称谓。熟悉日常生活中的一些问候语，能用有限的简单词语介绍自己或与他人沟通。（《国际汉语教学通用课程大纲》2014，p.1）</p> <p>（最も基本的な個人や日常生活と緊密にかかわっている簡単な、且つかなり限られた言語表現を理解することができ、時にはボディーランゲージや実物、言語環境を利用することができる。人に対する基本的な呼称表現を知っている。また、日常生活で使用されている挨拶表現を一部把握し、限られた簡単な語彙で自分を紹介したり、他人とコミュニケーションしたりすることができる。）</p>
二級	300語	<p>能基本理解熟悉的、与个人和日常生活密切相关的简单语言材料，并能就这些常见话题以较简单的方式与他人沟通，介绍自己或他人的基本情况。初步了解生活中表达情感（感谢、道歉）及态度（肯定或否定）的简单词语，了解不同场合的问候及告别方式。（同上，p.6）</p> <p>（個人や日常生活と緊密にかかわっている簡単な言語表現をおおよそ理解でき、これらの常用的な話題に対してやや簡単に他人とのコミュニケーションをとり、自分や他人を紹介することができる。生活にかかわる感情（感謝、おわび）及び態度（肯定、否定）を表す簡単な表現や、異なる場面に対応する挨拶と別れの仕方を知ることができる。）</p>
三級	600語	<p>能理解与日常生活和学习相关，并在一般交际场合重经常遇到的最基本的语言材料。能就熟悉的话题与他人进行沟通和交流，并就这些话题组织简单的语段。初步具备借助重音、停顿、语调或肢体语言等手段来提高交际效果的基本能力。（同上，p.11）</p> <p>（日常生活や学習にかかわる、または一般的なコミュニケーションの場面によく用いられる最も基本的な表現を理解することができる。よく知っている話題に対して他人とのコミュニケーションを取ることができ、これらの話題に対して簡単な一まとまりの言葉を言うことができる。コミュニケーションの効果を上げるためのアクセントやポーズ、イントネーションあるいはボディーランゲージなどの手段を取る基本的な能力を備えている。）</p>

上記の学習要領で決められているレベルと一致する中 認定基準を次のように定められている（表2）⁴⁾。
 国語の検定試験 HSK では、基礎段階である1～3級の

表2 HSK 1～3級の認定基準

	語彙量の目安	試験の程度
一級	150語程度の基礎常用中国語及びそれに相応する文法知識	中国語の非常に簡単な単語とフレーズを理解、使用することができる。大学の第二外国語における第一年度前期履修程度。
二級	300語程度の基礎常用中国語及びそれに相応する文法知識	中国語を用いた簡単な日常会話を行うことができ、初級中国語優秀レベルに到達している。大学の第二外国語における第一年度履修程度。
三級	600語程度の基礎常用中国語及びそれに相応する文法知識	生活・学習・仕事などの場面で基本的なコミュニケーションをとることができ、中国旅行の際にも大部分のことに対応できる。

（出典：HSK 公式ホームページ）

表1と表2で示すように、入門段階の到達目標では、「読む」と「書く」以外に、自己紹介や基本的な日常会話などのコミュニケーション能力も求められている。福岡大学では、一年生向けの中国語は、「中国語 I A」と「中国語 I B」に分けられ、週に1コマずつ授業が行われている。「科目水準」はいずれも「入門」とされており、到達目標は上記の学習要領の目標に似ており、それぞれ以下のように掲げられている。

「中国語 I A」の到達目標：

- ①教科書で学ぶ中国語の基礎的な語法を理解する。(知識・理解)
- ②中国語表記法の一つ「ピンイン」を使って概ね正確に発音できる。(技能)
- ③ピンインを概ね正確に用いて発音を記すことができる。また、習った単語・表現を簡体字で書くことができる。(技能)
- ④教科書で学ぶ中国語の会話・本文の発音を聞き分けられる。(技能)
- ⑤教科書で学ぶ中国語の会話・本文が概ね正確に発音できる。(技能)
- ⑥教科書の会話・本文にならって、基本挨拶、日常会話、自己紹介ができる⁹⁾。(技能)
- ⑦中国語学習を通じて異文化に対する興味・理解を深める。(態度・志向性)

「中国語 I B」の到達目標：

- ①教科書で学ぶ中国語の基礎的な語法を理解する。(知識・理解)
- ②教科書で学ぶ語法に従って初歩的な文章の解釈ができる。(技能)
- ③簡体字を用い語法に従って簡単な文が作れる。(技能)
- ④教科書の文章にならって自己紹介文や日常生活に関する簡単な文章が書ける。(技能)
- ⑤中国語学習を通じて異文化に対する興味・理解を深める。(態度・志向性)

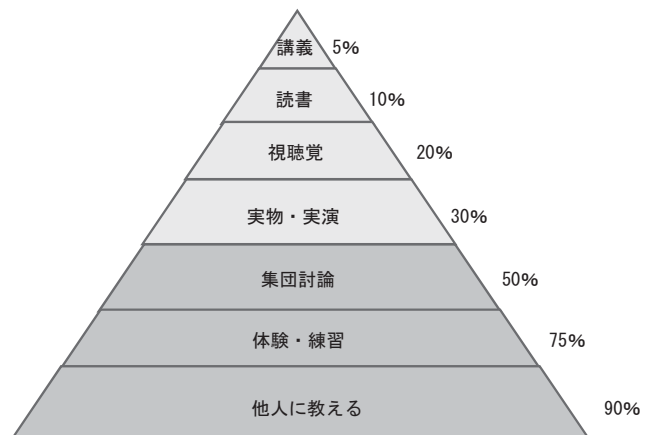
つまり、「中国語 I A」では、発話の練習を中心にし、初歩的な「話す」と「聴く」能力を身につけることを目標としており、「中国語 I B」では、主に中国語文法のしくみを理解することと、初歩的な「読む」、「書く」ことができることを目指している。しかし、冒頭のところで述べたように、表意性のある漢字に頼り、声に出して積極的にコミュニケーションをとろうとしない多くの学生にとって、「読む」と「書く」を中心に行う「中国語 I B」の目標を達成することはそれほど難しくはないが、コミュニケーションをとることを中心に行う「中国語 I A」の目標を達成するのはなかなか難しい。

この問題点を改善するために、入門の段階からコミュニケーション能力を育成する方法を探ってみた。以下の節でその実践例を紹介する。

3. 実践概要

外国語教育には、「文法訳読法」、「直接教授法」、「聴覚口頭練習法」、「全身反応教授法」、「コミュニカティブ・アプローチ」などたくさんの種類がある。コミュニケーション能力を育成するには学生を主体とした「アクティブラーニング」が提唱されている。例えば、インターネット上でしばしば見られる「ラーニングピラミッド」⁶⁾が示すように、「集団討論」や「体験・練習」あるいは「他人に教える」などのようなアクティブな学習方法が効果的である（図1）。

図1 「ラーニングピラミッド」



筆者は、入門の授業にコミュニカティブ・アプローチの方法を取り入れ⁷⁾、学生のコミュニケーション能力を育成するには効果があるかどうかについて試みた。

3.1 実践対象及び実施期間

筆者は、本学の人文学部東アジア地域言語学科の一年生を対象に、2019年4月から一年間わたって、共通教育科目の「中国語 I A」と「中国語 I B」の授業で、学生のコミュニケーション能力を向上させる実践的な取り組みを行った。

2019年度の前期にクラス1に、後期にクラス2に、共通教育の科目としての「中国語 I」を担当した。前節でも説明したように、週に「中国語 I A」と「中国語 I B」との二コマの授業がある。両方とも統一教科書の『漢語課本2019』を使用した。中国語 I Aは会話を中心に、「中国語 I B」は文法と購読を中心に授業を進めた。

3.2 授業の流れ及び実践方法

「中国語 I A」と「中国語 I B」の達成目標は同じではないため、授業の実施方法も当然異なる。しかし、授

業中に積極的に発言しない学生も多くいるため、会話を中心に行う「中国語 I A」の授業だけではなく、文法と購読を中心にする「中国語 I B」の授業にもコミュニケーション・アプローチを取り入れた。また、「学生が主

役である」というアクティブな授業を目指し、「中国語 I A」と「中国語 I B」の授業の流れを以下のようにデザインした。

表3 授業の流れと実践例

授業の流れ (時間)	授業実践例	
	「中国語 I A」	「中国 I B」
1. ウォーミングアップ (20分)	中国語で一言 概要： 点呼の時に、言いたいことを中国語で一言言ってもらおう。発言していない時は、ほかの学生の発言をノートにメモさせる。	同左
2. 復習のチェック (10分)	フレーズの書き取り 概要： よく使用する表現を一つか二つ書き取りの練習をさせる。漢字とピンインを書いたうえで、それに続く応答の表現も書いてもらう。	同左
3. 新しい内容の学習 (30分)	問題解決のディスカッション 概要： 事前に予習してもらおう。授業中では、新しい内容に対して不明な点を質問させる。質問から議論可能な問題を取り上げ、グループでディスカッションし、結論を出してもらおう。	同左
4. 練習・実践 (30分)	方法1 ペアで会話の練習 概要： ペアを組んでもらい、学んだ会話をアレンジしてから、発表してもらおう。 方法2 会話の相手探し 概要： 学んだ質問文から三、四個を選んで覚えさせた上で、それぞれ3人に聞き、相手の答えをメモしてもらおう。最後に、聞いた結果を中国語で先生に報告する。	作文の練習 概要： 学んだ表現を使って、購読の話題に沿って作文させる。

表3で示すように、「中国語 I A」と「中国語 I B」の授業の流れは両方とも「ウォーミングアップ」、「復習のチェック」、「新しい内容の学習」、「練習・実践」の四つの段取りをもとに構成しており、授業方法については、「練習・実践」以外は同じように設定した。いずれも「学生が主役である」というアクティブラーニングのスタイルを中心に据えた。特に「中国語 I A」だけではなく、「中国語 I B」でも実施した「中国語で一言」(ウォーミングアップ)と、「中国語 I A」で実施した

「ペアでの会話練習」あるいは「会話の相手探し」(練習・実践)は、どれも初歩的なコミュニケーション能力を身につけさせるための試みである。

3.3 結果と分析

全体の授業についての「授業アンケート FURIKA」では⁸⁾、「自己紹介」や「日常会話」などを学ぶことができたという声が多かったが、具体的実践例の有効性については確認できなかった。そこで、後期授業が始まって

2週間後に、後期から授業を始めたクラス2の34名の学生と前期授業で終了したクラス1の31名の学生に、実践例の「中国語で一言」と、「練習・実践」方法2の「会話の相手探し」について改めてアンケート調査を行った。

アンケート調査は、シンプルな質問内容にしており、授業方法について「大変良い」、「良い」、「なんとも言えない」、「悪い」、「とても悪い」の5段階評価で評価してもらい、さらに評価の理由も自由に書いてもらった。

3.3.1 クラス2 (34名)

後期から授業を始めたクラス2への調査は、実践方法を2週間（4回の授業）しか実施していない時点で行った。「悪い」と「とても悪い」を感じている学生はいないものの、「大変良い」と「良い」と評価した学生の割合は、「中国語で一言」は79.4%で、「会話の相手探し」は58.8%だけであった。また、「なんとも言えない」を選んだ学生は、「中国語で一言」は7名、「会話の相手探し」は14名で、「会話の相手探し」より「中国語で一言」のほうが評価された（表4）。

表4 クラス2の評価

	中国語で一言	会話の相手探し
大変良い	9名 (26.5%)	8名 (23.5%)
良い	18名 (52.9%)	12名 (35.3%)
なんとも言えない	7名 (20.6%)	14名 (41.2%)
悪い	0名	0名
とても悪い	0名	0名

(1) 「中国語で一言」

「大変良い」と「良い」と評価した学生は27名であり、評価の理由は主に「発音の確認ができる」、「聞き取る練習になる」、「作文力が身につけられる」、「話す練習になる」などである。

- ・発音チェックができるから
- ・自分の発音の間違えに気付けるからよいと思う
- ・中国語を聞き取る練習や復習にもなるから
- ・聞き取る練習になるし、緊張感をもって聞き取りができるから
- ・自分がどれくらい聞き取れるかわかるから
- ・今まで習った内容を使って文を自分で作って言うということは、本当に理解できているか確認できるから
- ・中国語の文を自分で作る機会が増えて、考える時間が多くなって身になるから
- ・復習もできるし、自分で文章を作る力を養えるのでよいと思う
- ・本当に習ったことが理解できているかわかりやすいから
- ・中国語に慣れやすくなるから
- ・話す練習になるのでいいと思う
- ・自分の言いたいことが中国語で言いやすくなる
- ・自分の言った文がきちんと伝わるか知れるのでよい
- ・すごい勉強になる。何もない状態で中国語を聞き取って、理解するのが楽しい

・中国語の実力向上に役に立つから

一方では、「なんとも言えない」を選んだ学生は、主に難しさを感じ、自信がないのと、この実践方法に慣れていないという理由が寄せられた。

- ・教科書で習った文しか言えないから、言える文があまりないから
- ・まだ中国語のレベルが高くないのでこれですること自分の実力が上がっているのかどうかはわからないから
- ・難しいのは自信がないから
- ・みんな教科書のことから言っているから面白みがない。でも自分が言いたいことを調べるのは好きです
- ・本文暗記して発音テストにしてほしい

(2) 「会話の相手探し」

「大変良い」と「良い」を感じた学生は20名にとどまり、「会話力が身につけられる」、「交流上に役に立つ」、「話す機会になる」などのような感想が寄せられた。

- ・フレーズを覚えて言うことで記憶し残るから
- ・実際に文を言うことで学べる
- ・たくさんの人の中国語を聞けるので、自分の苦手な発音を見つけることができるから
- ・人と会話することで身につけやすいから
- ・自分から話したいことは交流の上で大切だと思うから

- ・繰り返し練習ができて聞き取りの練習もできるから
- ・中国語をいろんな人を話すことはよいと思うから
- ・友達と中国語を話す機会はそんなにないから
- ・普段話していない友達とも交流できるため
- ・普段あまり話す機会がない友達とも話せる
- ・クラスのかかわりのない人と話せていいと思う
- ・いつも一緒にいる人だけじゃなくいろんな人と話せるから

また、コミュニケーション能力を高めるために設けた「会話の相手探し」は、中国語の実力だけではなく、コミュニケーションするのに、必要な積極性と勇気が求められる。アンケートの結果から、人数の少ない男子や内向的な性格を持っている学生にとって、やや受け入れがたいことが分かった。

- ・男子が少ないので、女子に話しかけづらい

- ・男子としては肩身が狭いかなと思う
- ・いつも時間が間に合わない
- ・あまり人と話すのが好きではないので、人数のノルマが高いと焦ってしまう
- ・探すのに時間がかかったりする
- ・相手を探すのが大変
- ・たくさん会話することは大切だと思うけど、近く座っている人だけとでいいと思う
- ・ペアが楽だけどたくさんの人とやることも大切な気がする

3.3.1 クラス1 (31名)

前期30回の授業を受けたクラス1の学生からの評価は、クラス2と大きく異なり、「中国語で一言」も「会話の相手探し」も「大変良い」と「良い」を感じた学生は九割以上を占めた(表5)。クラス2より長い期間で実践していたので、慣れていたと思われる。

表5 クラス1の評価

	中国語で一言	会話の相手探し
大変良い	15名 (48.4%)	16名 (51.6%)
良い	14名 (45.2%)	12名 (38.7%)
なんとも言えない	1名 (3.2%)	3名 (9.7%)
悪い	1名 (3.2%)	0名
とても悪い	0名	0名

(1) 「中国語で一言」

クラス1と違って、「発音の確認」、「会話力の向上」以外にも、「教科書以外の単語や表現を身に着ける」などの実力のアップを感じた学生も少なくなかった。

- ・自分の発音が伝わるかどうか分かるから
- ・自分の好きなことや知りたい単語を自分で調べることにより中国語に触れる機会ができたし、発音も間違っているところを理解し直すことができたから
- ・自分が言いたいことを発音して正しい発音ができているのか確認できたし、ほかの人が言った言葉もすべてすごくよかった
- ・学校で習わない文法や単語を知ることができた
- ・単語などを調べて楽しく覚えられるので良かった
- ・いろんな中国語の単語やフレーズが知れる
- ・会話表現や単語を自分で調べて発音することで覚えることができた
- ・日常生活で使えるような単語やフレーズを学べるのでよかったと思う
- ・自分の知らなかった単語がその場でわかったりするのでとても良いと思う

- ・自分だけではわからないことがわかるから
- ・授業ごとに知識が増えていく
- ・教科書では勉強しない日常で使えるワンフレーズをたくさん知れたから
- ・自分の身近な話題について話すことが多いので、教科書で使う分よりもっと日常会話で使いやすい表現が知れるのが良かったと思う
- ・自分の興味を持った言葉から中国語に関心を持つことができると思ったから
- ・いろいろな表現が知れて楽しかった

以上の自由記述のように、評価される一方では、実施する際に時間をうまく把握できない場合があり、「なんとも言えない」と「悪い」と評価したのはそれぞれ1名である。いずれも「日によって時間が長い、ここまで時間をとる必要はない」とのコメントを寄せた。

(2) 「会話の相手探し」

クラス2では、「なんとも言えない」と選んだ学生は14名もいるが、クラス1では3名だけであり、「大変良い」と「良い」と評価した学生は多かった。その理由の

多くはコミュニケーションを実感したからである。

- ・あんまり話したことない人ともコミュニケーションがとれるし、楽しかった
- ・積極的に話しかけることができ、中国語の基本的なフレーズも言えるようになった
- ・クラスの人とコミュニケーションが取れる
- ・コミュニケーションが苦手な私に人としゃべるチャンスをくれて、とても嬉しかった
- ・机上で文法を学ぶのではなく、実際に会話をしながら学習するほうが個人的に好きです
- ・普段中国語を使う機会がほとんどないので、会話などをすることは良いことだと思う
- ・まだ会話をしたことがない人ともやり取りができるので良いです。質問と答え方の勉強にもなります
- ・普段話さない人とも話せたので、コミュニケーションをとる良い機会になった
- ・みんなとコミュニケーションをとりながら会話の練習ができたので楽しかった
- ・話したことない人と話せるし、実際に使うことで覚えるから
- ・いろいろな人と話すことで、声に出すことに抵抗がなくなった
- ・会話のパターンが人をそれぞれだったので面白かった
- ・席を立てて会話するから頭がリフレッシュされる

また、「なんとも言えない」と評価した学生は3名いるが、そのうち二人しか理由を書かず、会話の相手を探すことを苦手に感じる学生もいることをうかがわせた。

- ・会話する相手が少し多いような気がしたから
- ・周囲の人だけででもできるかなと思う

4. おわりに

アンケート調査からは、本稿で取り上げた実践例は、一定の効果があることが認められた。初級クラスの授業では、学生の知っている語彙が少ないため、先生が一方的に知識を詰め込むような教え方になりがちであるが、学生を主役にし、学生自身がことばのレパートリーを増やしていき、自らコミュニケーションを取ろうとする能動的な授業環境を作らなければならない。また、学生の性格などもコミュニケーション能力に影響するため、学生の状況によって授業方法を工夫する必要があると言える。

注：

- 1) コミュニケーション能力とは、「コミュニケーションが必要な場面において、聞き手や話し手となった個人が他社と認知や感情を適切に交換するために用いる言語的・非言語的な能力である」（矢崎・高村 2014, p. 30）。また、日本コミュニケーション能力認定協会では、コミュニケーション能力の基本を、「聴く力」「質問する力」「説明する力」「協調性」としている（日本コミュニケーション能力認定協会ホームページ参照）。
- 2) 《国際汉语教学通用课程大纲》（2014）は、第二外国語としての中国語の学習指導要領であり、HSKの定めた6レベルと一致している。
- 3) 表中の日本語訳は筆者による。
- 4) 表中の下線は筆者による。
- 5) 下線は筆者による。
- 6) 横溝・山田（2019, p. 284）によれば、このラーニングピラミッドはアメリカ国立訓練研究所によるものであり、その信憑性に対する批判も数多く見られるが、この階層に説得力があるとする教育者も少なくない。筆者も実感的に納得する部分が多い。
- 7) 胡玉華（2009, p. 69）では、コミュニケーション・アプローチを「コミュニケーション能力の獲得を目的とする教授法」と述べている。
- 8) 授業アンケート（FURIKA）は、福岡大学の教育開発支援機構による、全学体制のもと Web による授業アンケートのことである。（福岡大学教育開発支援機構のホームページ参照）

参考文献：

- <中国語>
- 陈敬玺 2018, 《国际汉语语言交际能力培养论》, 人民出版社
- 胡玉华 2019, 关于“能动学习”效果的实践研究—以汉语初级班的教学活动为例一, 『中国語教育』第 17 号
- 孔子学院总部 2014, 《国际汉语教学通用课程大纲》(修订版), 北京语言大学出版社
- <日本語>
- 荒木雪葉 2018, 「中国語 II B 用教科書『漢語課本 II B』の作成に関して」, 『福岡大学研究部論集(人文科学編)』28 巻第 2 号
- 王毓雯 2016, 「初級中国語教育で必要とされる語彙とその特徴—福岡大学の統一教材『漢語課本』を教材に」, 『福岡大学研究部論集 A: 人文科学編』
- 胡玉華 2009, 『中国語教育とコミュニケーション能力の育成—「わかる」中国語から「できる」中国語へ』, 東方書店

- 佐藤慎司・熊谷由理2017,「コミュニケーション・アプローチ再考」,『リテラシーズ』,くろしお出版
- 謝平2020,「中国語専攻における初級段階の学習語彙について—新 HSK 4 級語彙リストにおける活用の可能性をめぐる—」,『福岡大学人文論叢』第52巻第1号
- 中国語教育学会学力基準プロジェクト委員会2007,『中国語初級段階学習指導ガイドライン』
- 椿由紀子2010,「コミュニケーション・ストラテジーとしての『聞き返し』教育—実際場面で使用できる『聞き返し』をめざして」,『日本語教育』147号
- 寺西光輝2015,「中国語入門教育におけるアクティブ・ラーニングの可能性—中国人留学生を TA として活用したマニュアル作りの実践—」,『椛山女学園大学教育学部紀要』第8号
- 平高史也2011,「CEFR から見た育成すべき言語能力とは何か」,『早稲田日本語教育学』第9号
- 溝上慎一2014,『アクティブラーニングと教授学習パラダイムの転換』,東信堂
- 宮下尚子2018,「福岡大学の共通教育中国語二年次用テキストについて—購読用教材を中心に」,『福岡大学研究部論集』(人文科学編)28巻第2号
- 矢崎裕美子・高村秀史2014,「『コミュニケーション力』を伸ばすための授業実践と学生の自己評価」,『日本福祉大学全学教育センター紀要』第2号
- 横溝紳一郎・山田智久2019,『日本語教師のためのアクティブラーニング』,くろしお出版